

第一章	李弘から寇謙之へ	西暦四・五世紀における宗教的反乱と國家宗教	69
序言	69
第一節	妖賊李弘の反乱	69
序章	道教と老子	老子觀の変遷と老子注	27
序言	27
第一節	道教と老子	28
第二節	道教と『道德経』	42
第三節	道教と老子と『道德経』	57
結語	65
第一部	南北朝以前の道教	25
総序	11

第二節 真君思想と李弘教団 73

第三節 寇謙之と国家道教 79

第四節 新天師道と真君李弘 82

結語 89

第二章 陶弘景の思想について その仙道理論を中心に 93

序言 93

第一節 伝記 94

第二節 詩賦―自適と飛翔― 95

第三節 仙道理論 100

第四節 仙道の実践 112

結語 117

第三章 宇文道の『道教実花序』について 北周武帝の『無上秘要』との関連を通じて 123

序言 123

第一節 宇文道小伝 124

第二節 三教論議の開催 128

第三節 北周文人と道教 131

第四節 通道觀と『無上秘要』 135

第五節 『道教実花序』について 139

結語 153

第二部 隋唐時代の道教思想 157

序章 道教と隋唐の歴史・社会 社会各階層と道教、及び道教教団の系譜について 159

序言 159

第一節 国家Ⅱ皇帝・士大夫・民衆と道教 161

第二節 道士・道教教団・宗派学派 170

結語 182

第一章 道教重玄派表微 隋・初唐における道教の一系譜 188

序言 188

第一節 老子解重玄派から道教重玄派へ 189

第二節 道教重玄派の成立と太玄派・靈宝派 201

結語 207

第二章 『太玄真一本際経』の思想について 身相・方便・重玄を中心に 212

序言 212

第一節 著者及びテキストについて 213

第二節 『本際経』の思想 215

結語 229

第三章 『本際経』のテキスト問題について 『本際経』の異称と卷九・卷十の連続問題 232

第一節 問題提起 232

第二節 『本際経』各巻の異称 234

第三節 『靈宝度人経変』と『本際経』 239

第四節 『本際経』十巻の纏まりに関して 241

第四章 成玄英の思想について 重玄と無為を中心として 245

序言 245

第一節 成玄英略伝及びその著述 246

第二節 成玄英の思想 249

結語 268

第五章 『靈宝度人経』四注の成立と各注の思想について 『度人経』解釈と重玄派 272

序言 272

第一節 『靈宝度人経』四注の各書の成立年代 273

第二節 『靈宝度人経』の構成と分章 276

第三節 『靈宝度人経』四注の内容 279

結語にかえて―義解と修持― 301

第六章 『海空経』の思想とその著者について 七宝莊嚴・十転の思想と益州至真觀主觀君碑を中心として 305

序言 305

第一節 『海空經』の中の特色ある思想……………306

第二節 益州至真觀主黎君碑……………314

第三節 十転の思想と「賈奕天經」……………318

結語……………322

第七章 「虚」の思想 初唐より盛唐に至る道家・道教思想史の一側面

序言……………325

第一節 「虚通」と「虚極」……………326

第二節 「虚極妙本」について……………332

第三節 「虚心」……………337

第四節 「虚—神—氣—形」……………341

結語……………345

第八章 韋応物と道教 真性・『真誥』・劉黄二尊師について

序言……………348

第一節 真性と白玉……………348

第九章 瞿童登仙考 中晚唐の士大夫と茅山派道教

第二節 『神農書』と『真誥』……………353

第三節 劉黄二尊師……………358

結語……………362

序言……………364

第一節 符載の『黄仙師瞿童記』……………364

第二節 閻宥の入道と劉禹錫の「遊桃源」詩……………371

第三節 温造の『瞿童述』と『江淮異人録』……………375

第四節 李徳裕の詩と民間の伝聞……………381

結語……………386

第十章 李徳裕と道教 茅山派道教の宗師・孫智清との関わりを軸に

序言……………389

第一節 茅山真隠孫智清……………390

第二節 李徳裕と孫智清……………396

第三節 茅山での伝法・受法 403

第四節 李徳裕と会昌時代の道教 407

結語 413

第十一章 杜光庭の思想について 道徳・古今・靈瀛の中で 416

序言 416

第一節 杜光庭の伝記と著作 417

第二節 杜光庭の思想 420

第三節 司馬承禎との関わりと杜光庭の道統意識 437

結語 442

あとがき 445

索引 v